

# バーミヤーン谷における 考古調査

— 2006年度 —

はじめに 独立行政法人文化財研究所は、運営費交付金による「西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業」およびユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「バーミヤーン遺跡保存事業」をおこなっている。2006年度はアフガニスタン文化青年省と共同で、2度の現地調査をおこなった。その活動の中から、2006年9月11日から10月16日にかけておこなった第7次調査における考古学関係の調査研究について述べる。

ガリーブ・アーバード地区 地域開発による破壊から文化遺産を守るため、保護されるべき遺跡の範囲を確定する目的で試掘調査をおこなった。玄奘が『大唐西域記』に記述した「王城」の推定地に対しては、2005年の第5次調査でタイプティー地区において調査を開始しており、2006年の第6次調査では場所をより大仏に近い東方に移したガリーブ・アーバード地区で3つの調査区を設定している。第7次調査では、さらに西大仏正面に近づいた箇所で4箇所の調査区(第4調査区から第7調査区)を発掘した。

全般に遺構の検出は少ないものの、第5調査区で側溝を伴う道路状の遺構を検出した。時期はイスラム時代である可能性が高いが、より遡る可能性もある。他の調査区も含め、確実に仏教時代と同定できる遺構は見つかっていない。地区全体に広がっている水成層が地山とみられ、この層を直接イスラム時代の包含層が覆ってい

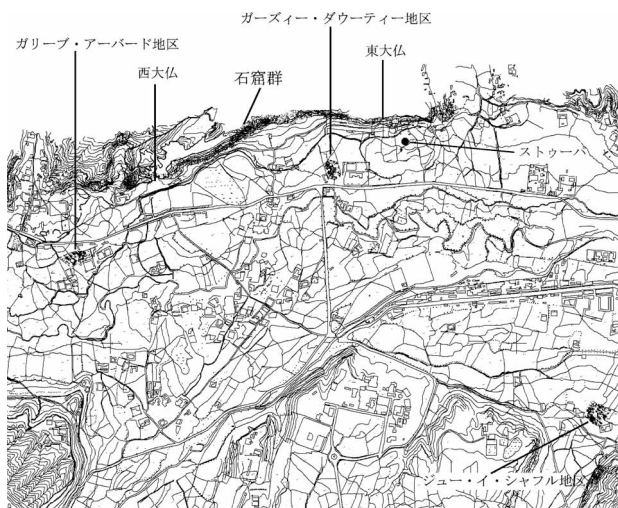


図3 調査位置図

る。ただ、出土品には仏教時代と考えられる土器が含まれているので、より崖に近い場所に仏教時代の遺跡が広がっている可能性が高い。

ガーズイー・ダウーティー地区 地業を検出した2005年の第5次調査の調査区(第1調査区)に、隣接するように調査区を設け、最終的には4箇所を掘り下げた。

2005年に確認したのは、地業の南西の辺にあたる部分のみで、長さも幅も確定していなかったが、今回、第2調査区で北西の辺にあたる部分を検出した。角の部分は調査区外であるが、南西・北西それぞれの辺を延長することでその位置を推定できる。また、南西の辺の延長上に設定した第5調査区では、地業を確認していないので、南西辺の長さは、最小で約35m、最大で約45mと考えられる。いずれにしても、東大仏の正面近くにまで及ぶ大規模な工事がおこなわれていたことになる。地業の上面は削平されている可能性が高く、今までのところ基壇などの痕跡は見つかっていない。

地業は砂利と粘土を交互につき固めているが、縁に近い部分は砂利を主体としており、必ずしも整然と仕上げているわけではない。

第2調査区において、地業の外側約2mで周溝を検出した。幅は約1m、深さは約45cmであり、径5~10cmの礫が詰められていた。この周溝は、調査区の位置の関係で1辺でしか検出していないが、地業を囲むように巡るものと考えられる。

遺物は、イスラム時代の施釉陶器、土器、青銅片、窯道具や窯壁といった窯業関連遺物、鉄鏝、銭貨がある。また、イスラム以前に遡るものには、精製土器、粗製土器、鉄滓、坩堝片があるが、施釉陶器はない。

ジュー・イ・シャフル地区 ジュー・イ・シャフル地区は中世の城塞都市であるシャフリ・ゴルゴラの北西に広がる地区である。第5次調査の際に地下探査をおこない、地表に残る土壇の東側を試掘調査し、ストゥーバの基壇の一部と考えられる遺構を検出した。

第7次調査では、土壇の北側と西側に調査区を設定した。それぞれ、北調査区、西調査区と呼ぶ。北調査区は約87㎡、西調査区は約39㎡である。

北調査区は、地下探査において何らかの構造物が存在すると考えられる強い反射が確認されていた部分に設定した。発掘の結果、イスラム期に構築された壁体とカ



図4 道路状遺構

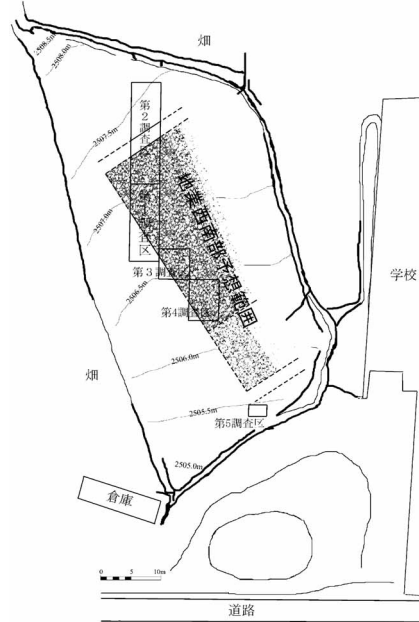


図5 地業範囲

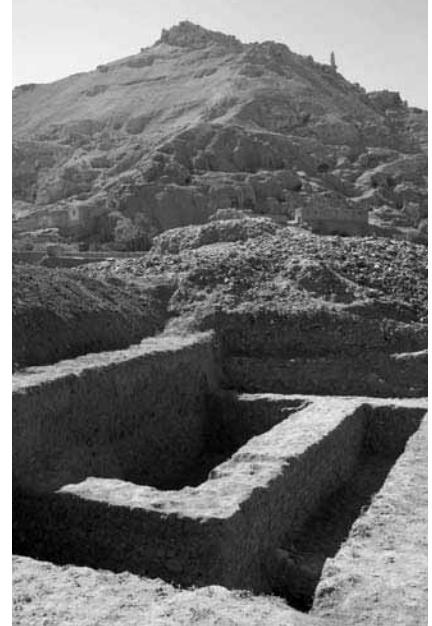


図6 イスラーム期の壁体

マドを検出した。壁体は、厚さ約1mで残存高が約1.2mある。壁体を載せる層はストウーパの基底面と同じ礫層で、自然堆積層と考えられる無遺物層である。カマドは2箇所検出しており、西側中央部では煮沸用の土器と大量の灰を伴っている。

西調査区西側でもイスラーム期の壁体を検出した。北調査区の壁体とは構築方法に違いが認められる。西調査区でも2基のカマドを検出している。

北調査区南端と、西調査区東側でストウーパの基壇を確認した。地山表面の高低差をなくすように、土を入れてつき固めて整地をおこなっている。この整地層に溝を掘り込み、外寄りに粘土を厚さ1cmほど敷いてその上に石灰岩の切石を据え付け、基壇基底部とする。切石の列は、直角に曲がる入隅部分と、そこから西北西に続く4石分のみを確認した。ただ、石が残存しない部分でも、切石を据えるための溝をさらに約1.7m分確認している。

イスラーム期の土器や陶器が多く出土しており、窯道具も見られる。焼成レンガが大量に出土したが、イスラーム期の壁体には用いられていないので、もともとの使用対象が何であったのかはわかっていない。ストウーパの外装用と考えられる石灰岩の中には、面取りしているもの、柱形を彫り出したものなどがある。また、片岩製の板石も出土している。

ジュー・イ・シャフル地区のストウーパは遺存状態が



図7 ストウーパ基壇切石列

悪いが、今回初めて基底部を確認することができたのは大きな成果である。また、この地区はイスラーム時代の城塞都市であるシャフリ・ゴルゴラに近接しており、今回検出した、頑丈な壁体を持った建物と大量の陶器は、この地がイスラーム期において生活の場として重要であったことを示している。

第7次調査においても、以前の調査同様、すべての発掘調査現場で、日本人専門家とアフガニスタン人専門家が協力して調査にあたった。今回の調査は、発掘調査の進め方、記録の取り方といった調査方法に関する技術移転にも貢献したと考える。

(森本 晋)